



夕凧の街 桜の国

夕凧の街 桜の国

2004年10月20日 第1刷発行

2005年12月10日 第12刷発行

著者 こうの史代

発行所 株式会社双葉社

感想と理由

ヒロシマの話

原爆の被災者や、その近親者の話

夕凧の街	昭和30年（1955年）	広島	平野皆実・23歳
桜の国（1）	昭和62年（1987年）	東京	石川七波・10歳
桜の国（2）	平成16年（2004年）	東京・広島	石川七波・28歳

いつか子供に読んでほしい。

何十年も前の、何百キロも離れた地での、遠い遠い物語。

だけどそれは、かつてあった出来事で、

きみは、きみの身体に流れる血は、決して無縁ではない。

昭和20年8月6日、広島に原爆が投下された。

広島市にある平和資料館は、今日も投下後の現実を知らしめている。

大量殺戮破壊兵器により、多くの人間が死に、多くの人間が苦しめられている。

語り部たちも、数を減らし続けている。

原爆により多くの人間が死んだが、原爆により生まれた人間もいる。

私の祖父は、原爆により、妻を喪った。

再婚して、私の祖母は母を産んだ。

母が成長して私を産み、

私が成長して子供を産んだ。

原爆はたくさんのものを奪い、多くの無惨を残した。

それでも、人間は生き続ける。

夕凧の街にあるように、投下から十年が過ぎても、多くの人が不安の中で生きていただろう。

人々は生きて、命が誕生して、大切に育み、新たな命へとつないでいく・・・生きること

。

原爆が投下されても、人々は生きていた。

私やきみの中に流れる血が、その証だと思う。

放射能の残滓に怯えても、生き続けたから、いまも生きている。

「

・・・あんた被爆者と結婚する気ね？

母さん・・・

何のために疎開さして 養子に出したんね？
石川のご両親に どう言うたらええんね？
なんでうちは 死ねんのかね
うちはもう 知った人が 原爆で死ぬんは見とうないよ・・・
」 P84

被爆した後、若くして亡くなった人、見送り続けて年老いた人、様々だろう。
そして、被爆していないからこそ、恐れる人も、いただろう。

「
・・・母さんが 三十八で死んだのが原爆のせいかどうか 誰も教えてはくれなかったよ
おばあちゃんが八十で死んだ時は 原爆のせいなんて言う人はもういなかったよ
なのに
風生もわたしも いつ原爆のせいで死んでもおかしくない人間とか
決め付けられたりしてんだろうか
」 P86

夕凧の街 桜の国 は、書評で何回か見かけた。
なかなか読む機会に恵まれず・・・今回、やっと読めた。
原爆投下後の世界。
2世代にわたって描かれる被爆者たちの日々。
自然界における放射能とは比べ物にならない、人間を死に追いやる原子爆弾。
それが日本の2箇所に落とされても、人間は生き続けた。
いま読めて、よかった。

いつか子供に、原爆が無縁でないことを話そう。
いつか子供に読んでほしい。